
月 刊

MéLange

Vol.121



2017.03.26

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.121 2017.03.26

「月刊めらんじゅ」編集部

新連載／詩評

言の次第「詩の系譜」……………富哲世 03

詩 & 俳句

受難詠 (俳句)……………岩脇リーベル豊美 04

万愚節 十五句 (俳句)……………高橋雅城 05

散骨……………野口裕 06

グッピー……………中嶋康雄 07

アムゼル……………北岡武司 08

妖精ナンパ法……………福田知子 08

帰れないバス……………黒田ナオ 09

よりてかみ のぬし……………中堂けいこ 10

もぐりこみ……………大橋愛由等 11

ヨナ 散歩ね／夕とどろきが聞こえて……………木澤 豊 12

一日の理由 (ルバイヤート風) 25-28……………大西隆志 13

かこがわ……………高谷和幸 14

花摘み……………富哲世 15

連載エッセイ

神戸詞あしび 110 「震災で生まれた詩人の協会 20年の歩み」……………大橋愛由等 16

編集部日より★40／わたしが代表を務める図書出版まろうど社から第一句集『辺縁へ』を上梓した望月至高氏が、第二句集『俳句のアジュール』(現代企画室)を出版。わたしが事務局をつとめ、神戸のスペイン料理カルメンで出版を祝う会を催した(3月20日〈月〉)。参集したのは14名。東京から版元である現代企画室の太田昌国代表をはじめ、俳誌「豈」代表の大井恒行氏、フランス文学研究者の野崎次郎氏の顔も。あらかじめ祝う会に案内状を出した人たちには、句集のなかから五句を選んで書いてきてほしいとの要望を書き添えていた。祝う会の当日に寄せられていた五句選を一枚の紙に印刷して出席者に配布した。すると、面白いことに、選句した句の重なりが殆どないことが判明した。これは俳人としての望月氏のまなざしの多角さのゆえであろう。／第121回「Mélange」例会の読書会のチューターは、小説家の高木敏克氏。語るテーマは、去年死去した俳人・永末恵子氏の俳句世界について語ってもらう。永末氏は高木氏の夫人。高木氏は主宰する出版社「航跡舎」から永末氏の句集を四冊上梓している。(大橋記)

新連載／言の次第

「もう明日はないのだった」
◎詩の系譜
詩集『藻の未来』中の主調音とも言える倉橋健一先生のこのことばは、生をつなぎ止め分かち合う謂わばぎりぎりの「愛の証し」のようなものだったが、わたしにはその生きねばならぬことの切実さは、「また明日会いましょう もしも明日があるのなら」という鮎川信夫(そう言えば今期の鮎川賞は伊藤浩子さんが受賞者のひとりだったそう)の戦後詩の詩句への歴史的応答でもあったように響く。そしてその明日への痛みの詩想は、たとえば岸田将幸さんの発熱の詩集『亀裂のオントロジー』の中にも濃密な血のなかにあ

るべくして受け継がれていることだと思ふ。そしてそのことに詩人の詩のことばへの信頼の系譜のようなものを感じる。詩人であるとは言葉の系譜の自覚を背負うということなのであろう。(つらつら、わたしが詩のごときものを書き連ねながらついに「詩人もどき」であったことのそれが理由のひとつ)。

寺岡良信が詩人であったのは、かれが詩集上梓にこだわり、詩集を遺したからではなく、日本語に対する系譜の自覚をまがりなりにも偏愛の美学として持ち得た、その信頼によってではないだろうか。その本望ささえあれば眼前の死などは怖くはないのである。それが寺岡良信にとつての、乾坤の場での、死の超克だったのではあるまいか。

富哲世

◆受難詠

岩脇リーベル豊美

沙羅双樹は見たことないけどこの匂い
日葦伸ぶ黒猫うしろ姿切り絵
朽ちそうな愛を砕くなら謝肉祭
ひと昔前だが厄亡霊になっていた
春霜に二項対立の裸足でいる
平和とか感じないから巴里へ磔刑
小斎微光呑み込んで酒やめません
彼は処刑黒を着るけど春が来る
ピアノに膝ぶつけたのに不思議痛くない
血ばかりで嫌だと年下は人類の身代わり
ま、いいか乗馬日和のカフェ・トゥ・ゴオ

暴走族貝拾いとミーティングの砂浜に
移動遊園地で詩を書けば観覧車の速度
家なしのインコ迷い込むわたしの本棚
無限の質問宿す海神大津波になり
先だけど今夏も魚棚連れてつて
十字のまま真昼に霞む遠近法の錯乱
うめやまなしすべてのにおいごちやまぜに
もの捨てるもひと捨てるもよし弥生ちゃん
猫の散歩はかはたれぎらぎら鬱らゆく
旅先より蜥蜴図送られタイムラゲ
観念の足し算君と我が Passion
君還るエンジン音の花曇り
夜の果てに羊を屠り蘇生する
三月は死者の数だけ鐘をつく

◆万愚節 十五句

高橋雅城

明日あたり晴れたらいいね春大根
手折られて朝のいきおい猫柳

エイプリルフルのスマートフォンに湧く
晩年殺生なるようになれ螢鳥賊
霾は納屋にも無縁仏にも
旧作に矢張りこのやうな句あり。駄句なり。
海市立つ屑鉄ひろうメカゴジラ

かくなる句にて、某句会特選二つ、並選二つを得。おもしろ
べからず。
まつさらのルーズリーフを開き春 既出

リメイク。シン・ゴジラ昨年公開の邦画としてもつとも際だ
てり。シン・ゴジラはCGにして姿を見せず、発音のみ響け
り。
あのあたりシンゴジラゆく臚なら

臍を曲げてリメイクするに。
まつさらのルーズリーフに花粉症

シン・ゴジラと云へば。
新世紀エヴァンゲリオン万愚節

絶妙な呼吸深呼吸四月

木登をしてみてもここに春闌ける

旧作に、かくなる句あり。
エイプリルフルのキョーレオピンを呑む

しゃぼんだま三時のおやつは文明堂
風車居間は留守なりさて屋根は

リメイクするに。因みにさる教習所にてiフォンと印字さ
れをり。圧倒さるる。

◆散骨

野口裕

その声は
朗々とおじいちゃんの最後の物語を
ベンガルから遠く離れた地での語らいを飾り
響いたそろそろ君の骨は
ベンガルの海に沈んだろうか
今頃になって
あの声がこちらの脳裏にこだまする「アホなジャパネポトウア 最後の宴」
と墨書された小さな会場の
棺の蓋が閉じられるまで
君の口はぼつかりと開けられて
あのなあ
そう言いたそうだったほんでな
かさかさになってたおじいちゃんの皮膚が
火葬の途中でぴかぴかに
耀いてくんねん
身の中に沈んでいた脂が表面へと
浮いてくるんやろなあ
まるで生き返ったみたいにやで撒かれた骨は
ばらばらに砕かれた泡となり
ひとつひとつの泡が潰れるたびに
ほんでな ほんでな ほんでな
とつぶやいていそうでベンガルの紙芝居ポトウアを
みずから口演する前から今
その声を聞いている

◆グッピー

中嶋 康雄

裏の堀にグッピーを捨てる
ウシガエルの死体の周りを泳いでいる
死肉でも啄んでいるのだろうか
長くてきれいなはずの尾鰭はもうぼろぼろだ
生きるウシガエルはボーボーと鳴いて
ボーボーと鳴きながら
グッピーを食べながら
生肉をグッピーに啄まれている
坊主めくりに飽きて
畑に出ると
ボーボーが気になって
そろそろと堀に近づくと
「お堀になんか寄りつくな」
とサヤエンドウを摘みながら
祖母に大声で叱られる
お堀の主は大きいらしい
人の子が好物らしい
それでもグッピーがプクプク放つ
お伽噺を聞きたくて
目を盗む
「グッピーはアマゾン川にいる」
と祖父は爪楊枝を使う暴れるビールを飲みながら
茄子の漬け物を突き刺しては口にねじ込む
漬け物は漬かりすぎている
グッピーは共食いをする
生んではすぐに目の前をよちよち泳ぐ我が子を
パクパク食べてしまう
ウシガエルはボーボーと鳴く
カラスノエンドウがピンク色の花を咲かす
エンドウの蔓はなんにでも巻きつく
眠っている間に巻きつかれ
血を吸われてしまう
全部吸われてしまうまで
毛布のような子守歌が歌われ
なかなか目が醒めることはない
のどが渴いてやつと目が醒めると
体が風にふかれて散ってゆく
グッピーはアマゾン川と堀にいる
堀で口をパクパク開けて待っている
台風が近づいている
台風の大きさは観測史上最大だという
グッピーが一斉に鰭をヒラヒラ動かしている
グッピーが一斉に鰭をキコキコ漕いでいる
台風は堀の上空で突然消滅する
グッピーが食べたらしい
グッピーがげつぷをするたびに
台風が小出しに渦巻く
市議会議長の祖父は小出しの台風を網で捕まえては
議場で放すウシガエルのボーボーが聞こえる
グッピーのパクパクが聞こえる
祖父の台風を食べにきたのだ
ついでに五月蠅い議員を食べる議員が反対しながらグッピーの腹におさまる
反対する議員が議場から消えるので
議案がどんどん可決される
「議長のグッピーは市長のまわしものかい」
「そういえばふたりともグッピーの闇にそ
っくりだね」人の子とグッピーの子が
システムに通う
システムのジャングルで
人の子は迷う
グッピーの子は迷わない
グッピーが人の子をどんどん食べる
グッピーがどんどん交尾する
グッピーがどんどん生まれる
グッピーが泳いでいる
グッピーは世界中にひろがる
グッピーは世界外にいるかもしれない
グッピーは食べている
死んでもしばらくは食べている
己の死体が腐って溶けて
なくなっても
しばらくは食べている

◆アムゼル

北岡武司

ロロロロ ロローニヤ
ロローニヤ ロローニヤ

夜が白んで
霧がおもむろに
うすくなる

ロロロロ ロローニヤ
ロローニヤ ロローニヤ

黒歌鳥のさえずりは
春の芽生えを奏で
フルートの音のよう

ロロロロ ロローニヤ
ロローニヤ ロローニヤ

裸のまゝのケヤキも
若芽をほころばせ
春の装いをはじめ

ロロロロニヤ ロローニヤ
ロロロロ ロローニヤ
春だ 春だ 春がきたよ

◆妖精ナンパ法

福田知子

逢いたいと思う人にしかみえないソーダ
見つけたいと思う人にしか見つからないラーシ

ルルルあいたいとおもう
さがしにいこうラララ

もしもあなたが夜更けに遠出をすればラララ 嘆くニレの樹 トトト 怒るオ
ーク モムン 歩くヤナギに出会うでしょう 病気のビビビ ニレが切られる
と ララト 隣の樹もいっしょに枯れ レレレ ニレは嘆く 切り倒され怒る
オーク ラクラ クラ その切り株から生えた若木は悪意に満ちており オロ
ロ夜更けて通るのは危険 ヤナギは ヨユヨユ夜になると自分で根っこをグザ
グザ引き抜き タタタ旅人の後ろを何やらつぶやきながらタタタ タタタとつ
いてくるのです…

樹の中 森の中 山の頂 緑の草地 洞穴の中 丘の中 地の下 泉や湖の下
波の下 霧のかなた 海のかなたの薄明り の かなた…

ミルクの流れる、蜜の湧き出る、葡萄酒の流れる川…
妖精たちの好きな大麦、カラス麦、木苺、ラズベリー、キノコ、苔…
赤い実のなるトネリコ、ナナカマド…
生命あふれる赤色エネルギーで悪魔たちを鎮めてくれるでしょう

そうそう妖精のために一杯のミルクを窓辺に出しておくことも忘れずに、ね。

◆帰れないバス

黒田ナオ

運転手は黒牛
行き先表示が無いまま
地面からいつも
五センチばかり
浮かんでいる

バスに乗ったとき
お隣の山村さんは
帰って来ない
次は誰が
乗って行くのだろう

気がつく
大きなマスクをつけて

夕暮れのバス停に
立っていた

月が待っています
何処からか声が聞こえてきて
静かにバスがやって来る
ドアが開いて乗り込めば
乗客はマスクをつけた女ばかり
無表情で
ただ前だけを見つめて

見送っているのは
大きな魚を抱えた男たち
横に並んで
声をそろえ
知らない歌を歌っていた

さようなら
さようなら
わたしは黒牛のバスに乗る
骨まで黒いバスに乗る

◆よりてかみ のぬし

中堂けいこ

く、草書きのふとほそをはしりこみそのいきおいあまる
い、夜半のサファリに東風が道風よりてかみはこびたる
いつか道は東に、東は道であったと二度寝のあけがたに
居易が居易が、
う、わたしの叙述はおいつけぬまま六言律詩をさまたげ
る、道風の草書きをたどりたどりつ筆運のてくびをほぼ
うしなわれた陰陽刻のらつかんは名をきらめきえだはにつながる

◆もぐりこみ

大橋愛由等

木戸は
風か
ぼくが
閉めたのか
分からぬまま
ぎいいいいと
薄暗くなり
そこには
生花 枯れ花も
ないことに
語りかけも
しるしを
置こうにも
遺された
ものたちは
所在なく
ぼくをみつめ
ダークグレーの
部屋を
ながめまわし

たとえ
灯りを
つけたとしても
甦つてはきはししないと
ものたちは
わかつているようで
押し黙り
ぼくが
「またひとりに」
と言い出さないか
あの歌を
聴こうと
語り出さないのか
遠い目をした
旅人に
ならないのか
昨晩とうとう
呑まなかった
ココナッツジュースの
コップが
いつのまに
ぼくのカバンの中の
手帖に
もぐりこもうと
しているのを
ぼくも
ものたちも
誰も

とめようとせず
さていつ
この部屋をでるのかは
ぼくではなく
ものたちが
知っていると
希臘文字が
刻印された
鍵は
もぞもぞ
ぼくをさがし
この部屋に
遺しておくものは
なにひとつ
ないつもりが
寒さのせいに
したいぼくは
不覚にも
ひとつだけ
こぼれおちた
それ
に
いとおしさも感じず
うつむき
伏し目がちなまま
ものたちに
目配せする

◆ヨナ 散歩ね

木澤豊

頭のうしろに陽が昇ったら
やりたいことはすると 見なかった鯨に約束
した
あいつは 小さい目と涙で
わたしのどこかが欠けた踊りを見つめていたな
でも じっさいは真つ暗なガード下にしゃが
むと
ばか薄っぺらい月が ゴミくずを流す川に昇
りました
という手紙には〈遠くに向かつて〉と書いてあ
りました
いまは〈聖洞窟時代〉のまっただなかと呼ばれ
ていました

いやですねえ 老いるのは
鯨の目は外へ開かれていて
ビルのシルエットに入りこんでしまつて
光のまっただなかでは じっつは
灰色ですが 黄金に輝く
かつて あの黄色と黒の縞模様を急いで渡つ
たものでした
いまは 机上に〈Please stand by me forever〉
と彫り込まれた

わずかな影を落として
傷ジッポのライターが置かれています

〈そばにいて〉っていわれても おれ 浮浪の
民だ
失うかもしれんし 見失うこともあるだろう
目を近づけると 机に止まった羽虫が
かすかな虹いろを発して もがいている
うちへ帰るか 帰らないか
ゆらゆらする 足下のドブ水に訊くと
ふん 手足がつめたいねえ
だつて

◆夕とどろきが聞こえて

木澤豊

鳶のかたちで空の端をかすめたものあり
地平線がそそり立つ岸壁になり
そこからわたしたちは出港することになる
と 待合室の拡声器が伝えた
古びたも木柵のむこうは銀に波立ち
鳥の目が光つて
閉じられたまま陽が傾いていった
鳶が墜ちていったあと

一羽 かもめが黒点になって視界を切ったが
一九四八年のコトワくんは どうしているだ
ろう
あるとき かれの父と小さな谷にロープを渡
して木を切ったな
空を電車が打越坂をのぼる音がして
パンタグラフが架線に躓いてぱちぱち鳴った
三人組のスワくんは どこへいったか あれ
から
十六年めに訪ねると あの頑丈なバラックは
なかったねえ

かもめが飛んで
おれは舞鶴に引越して
大阪に出て いまは
大和に住んでるよ
八十年たつて

黒い鳥のかたちをして
銀の波のかたちでくりかえし
押し寄せているのは
いまは かもめの影が
わたしを切り裂いて
見えなくなつた
じゃあな
じゃあな
じゃあな

◆一日の理由 (ルバイヤート風)

大西隆志

25
うつすらと光が床からやつてくるアジア
東に向かつて竿を振ると地を爬うもが掛かるルアー
森の梢には異郷の客が騒がしい、こうなつたら赴けシリア
喪の期間が過ぎた古代遺跡からはいまだ硝煙のエリア

27
君の抱えている地の名前に祓われたいにしへの郷へ
言の葉の脈が散りながらの死者の魂を込めて放つのはへらへ
ら、笑いながら、踊りながらの催馬楽に添わすした身体の輪郭へ
時の流れの座で口と鼻から漏れるのは超常現象の屁

26

河原の小石の上に影を引きながら一羽二羽
流された家屋と人が、そわそわ世話をやく庭
川筋を幾度も変えている大きな川のある町で振り下ろす鍬
鍬だらけの皮膚に描かれた怖い三輪の縄

28

一瞬にひかるのは穴に閉じ込められた和服姿での指揮
弦は下降し、上昇の旋律は闇に閉じ込められていながら喜々と響き
夜明けまでの時間を鎮めるのは乙女、女房の草摘む歓喜
かなたの山の頂にたなびく白髪、と天で遊べる旅の足跡の奇跡

◆かこがわ

高谷和幸

かこがわで乗り換える意識のあきらかな隠匿性こそ駅の流動するもの。わたしはもう表面がない。それから「・・・彼は、もう表面がない」なにも「隠れる場所のない、その肯定？」の空間のよじれたたわみが、胎生の蝮の息づかいに思える。わたしは、それから「・・・その彼は」の食い破り。動物と思われた幅広い裾。「フタツニ」わかれる始点の、ひれのぬけがら。わたしは年老いて立っていた。「わたしたち」は年老いながら「言葉の認知空間を」つまみあげていた。くしげの記憶する若い肉体を求めていたのかもしれない。「川の子宮から」吠える犬の幻影が回りまじりるパブで、水の色がする不思議なカクテルを飲んだ。消えた町、見えない表面は3月5日の乗り換えの時刻が近づきつつあった。わたしはもう表面がない。それから「・・・彼は、もう表面がない」エクリチュールの隠匿性はメデイウムのその軌跡と言うのも恥ずかしいが。「かこがわ」と呼ばれた人物が中州のように生まれたのは事実。駅のプラットフォームホームで、わたしは「水から（自ら）上がる」といいにおいがするわたし」という言葉に取りつかれていた。

◆花摘み

富 哲世

蓬菜の人々は生まれてから死ぬまで微笑んでいる
ラフカディオ・ハーン 「蓬菜」

君がイヒヒと言ったら
ぼくは書物だ
イヒヒと言ったら
それが書物だというふう
菜の花が好き
ははが壊れて
もうだからでもだからでもない
春の戸を開け
(どちらか井戸であることに変わりはない)
工場棟に住宅のまぎれ込む
くすんだ雨の横丁
駅へ向かい
こころのくさをひいて灰色の塀沿いを歩く
そんなに楽しいのかい子供
虹の浮く側溝の
明る過ぎるふたごの空
ミドロと糸ミミズの花籠の蠢く

ケミカルな上澄みのなか
空き缶にぎりぎりのヒゲも息づく
許してくれ
遠ざかるでも近づくでもなく
滅びに堪えて
とどいている世界
もう少し
もう少し
覗き込めば
きつと何かの顔が見える
すれちがい
息を交わし
歩みと歩みの終わりを
継いでいかねばならない
牛も花もない
遊星王子
迷子なのはわたし？
(悲しみは同じ)

台風の逝った朝浜へ出ると
河口の汀に片脚を上げて斃れた農馬がゆら
ゆら波に洗われていた
天井川のおくたの流れに
死んだブルドッグをさんぶと投げ捨ててみた
生きた証しを流すみたいに
ひどいやつめでも懸命に生きてみたんだ
また嘘を産む水に生えた低い幹や葉叢の梢

に躓きながら
遙かにかすむ肥沃のかなたへ
産業と敗退の先へ
だまつて犬は川原敷きへ流されていった(ラ
ラ)

ひとときの伝言となって
ゆけば「おにのくに」
帰りはななふしの里
先生ページの先に
蓮花畑があり
ページとページの近道に食べる者がいて
拒むことを知らずにうなずきながら
もくもくと花を囓んでいる
牛を食べたいなあ
うん食べたい食べたい
トキの乱れた藪を抜け落ちるかげ
眼に見えて小舟は沈みかかっている
そうさなあ
さいころ振ってまずわが身を救うこつた
ぼくはそれを救いたい
テーブルにあつい紅茶とドーナッツがあり
追いかけてももう遅いような気がする
ゆけば鬼のくび
帰りはななふしの里
記憶だけが水に濡れ
水からあがる落武者たち

うた 神戸詞あしび

110-2017.03.26 大橋愛由等



挨拶する有馬氏

この年譜をみて感じるところは多々ある。兵庫県現代詩協会が生まれた大きなキッカケは、一九九五年一月一七日に発生した阪神・淡路大震災であること。人・モノ・都市に甚大な被害をもたらした震災に直面したひとたちは、なんとか生き残った

この年譜をみて感じるところは多々ある。兵庫県現代詩協会が生まれた大きなキッカケは、一九九五年一月一七日に発生した阪神・淡路大震災であること。人・モノ・都市に甚大な被害をもたらした震災に直面したひとたちは、なんとか生き残った

注目してほしいのは、巻末に掲載した46ページにわたる年譜で、「二〇〇年の歩み」と題して、協会の二〇〇年及び活動内容を紹介している。かつ会員が出版した詩集、評論集、エッセイ、訳書、詩誌などの情報を添えている。

震災で生まれた詩人の協会二〇〇年の歩み

多くのスタッフに協力をあおぎ、『ひょうご現代詩集2016』（兵庫県現代詩協会）を編集担当した。同詩集は、兵庫県現代詩協会の創立20周年を記念して編まれたもので、会員の詩作品をあつめたアンソロジー集である。巻末には協会の歩みである年譜を掲載している。

また会員が出版した詩集などは、現会員からは直接情報を蒐めればよいのだが、物故か退会した会員の出版物については、会員からの情報提供をおおぐことになり、完全な形でこの二〇年間の会員の出版行為を記述することの困難さを思い知った。それでもネットなどの情報を頼りに、なんとか形にすることはできたのではないかと思っている。

この『ひょうご現代詩集』の編集をわたしが担当したのは二回目。前回は三宅武・元会長とともにかわった（主な実務はわたしが担当）。こまかな編集作業の要諦（原稿依頼や校正などの手順）は三宅氏が確立してきて、今回わたしが担当する際にも、大いに参考させていただいた。もちろん出版編集を

一九九七年に発生した時にすでに会員になって今も協会にかかわっている会員もいれば、すでに鬼籍に入っている会員もいて、年譜の編集は、その二〇年のうつろいを深く感じ入る機会となった。

多くのスタッフに協力をあおぎ、『ひょうご現代詩集2016』（兵庫県現代詩協会）を編集担当した。

を設立することで、生の結ばれを形にしようとしたのだ。

詩と評論

月刊「Mélange」Vol.121

神戸

2017年03月26日 通巻121号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)

maroad66454@gmail.com

定価600円(税別)